辛島家の交流

肥後辛島家ゆかりのひとびと

細川重賢の親書

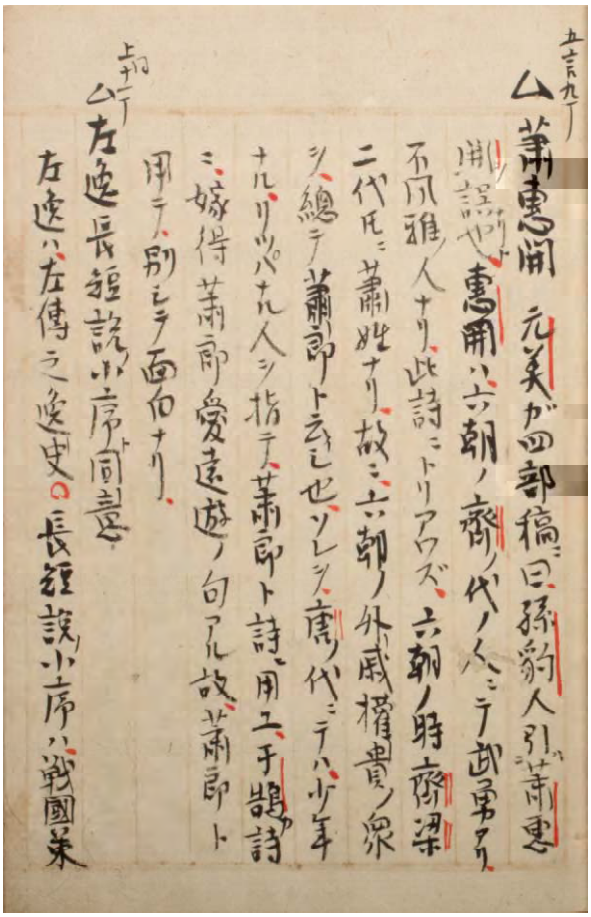
17　絶句解書抜

江戸時代中期

「絶句解」一巻は、荻生徂徠が享保年間に、明朝の古文辞学派の李攀龍・王世貞の詩を解説したものであり、古文辞学派の教本として広く読まれた。

本資料には、「此抄　重賢公親書以賜玉山先生々々又贈諸余々於是深蔵於家」と、第七代・義助による奥書がある。

このことから、熊本藩主・細川重賢が秋山玉山に与え、さらに玉山から門人の義助に贈られたことが分かり、木箱に収納して辛島家で保管されていた。



秋山玉山、富士登山の喜び

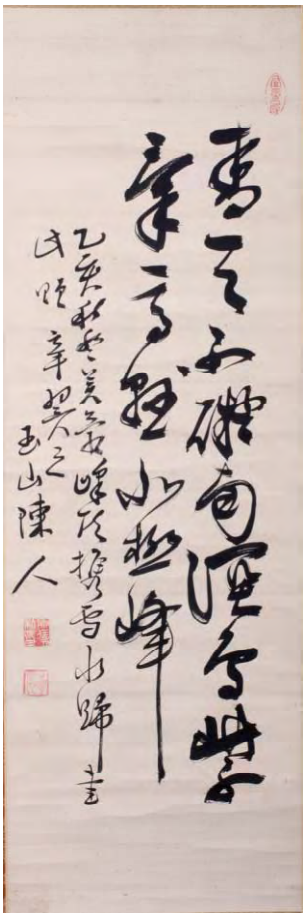
18　秋山玉山七言二句書幅

宝暦五年（一七五五）

秋山玉山の「三願」のひとつである富士登山は、玉山が初めて江戸に上ったときから三十年来の宿願であり、その想いを「望芙蓉峯」として詠んだことはよく知られている。

宝暦五年（一七五五）七月、藩主・細川重賢から特に許しを得て、念願の富士登山を果たすことができた。このとき、玉山は、芙蓉峰の異称を持つ富士山の山頂でこの句を詠んでいる。

本資料は、玉山が持ち帰った富士山の雪水で書をしたためたとされ、「辛翼之」（第七代・義助）に贈られたものである。



青天不礙南溟鳥　紫気高懸北極峰
乙亥秋登芙蓉峰頂携雪水帰書
此贈辛翼之
玉山陳人

▲松平定信の編纂

19　集古十種　名物古画

寛政十二年（一八〇〇）

「集古十種」は、老中として寛政の改革にあたり、好事家としても知られた松平定信が、柴野栗山や谷文晁らに各地の古美術の調査・編集を命じ、全八十五冊が刊行された。その一冊である「名物古画」は、三十一点の古書画を掲載している。

本資料の箱書には、「是一冊前閣老白川少将楽翁老侯之所賜外臣憲者永蔵諸家子孫其寶也」とあり、「憲」（第八代・才蔵）が「楽翁老侯」（松平定信）から贈られたものと分かるが、どのような経緯であったかは不明である。

▲頼山陽、才蔵を訪ねる

20　頼山陽七言律詩書扁額

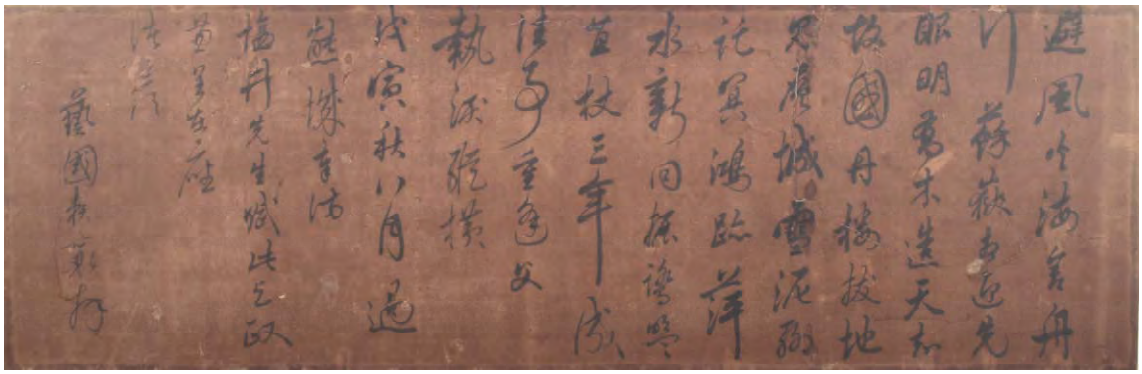
文政元年（一八一八）

「日本外史」で知られる頼山陽は、文政元年（一八一八）に九州を旅行し、知人のもとを訪れている。

熊本では、父・春水の友人であった第八代・才蔵を訪ね、熊本城下の学者たちと親交を深めた。

この漢詩は、「山陽詩鈔」にも収録されているが、本資料とは一部の字句が異なっている。

なお、本資料は損傷が激しかったため、今回最低限の修復を施した。



避風火海舎舟行　蘇嶽相迎先眼明
喬木造天知故國　丹楼抜地見層城
雪泥聊託冥鴻跡　萍水新同振鷺盟
苴杖三年成往時　重逢父執涙縦横
戊寅秋八月過
熊城奉訪塩井先生賦此乞政
並呈在座諸彦
藝国頼襄拝

21　楽享貞心幅（谷文晁松画）

享和三年（一八〇三）

幕府から招聘され、昌平坂学問所で経学を講じていた第八代・才蔵は、学問所の柴野栗山・古賀精里・尾藤二洲（寛政の三博士）をはじめ、諸国から集まった知識人と交流を深めた。

本資料は、昌平坂学問所での講義を終え、熊本への帰藩を間近に控えた才蔵に贈られたもので、谷文晁が松を描き、柴野らが賛を添えている。

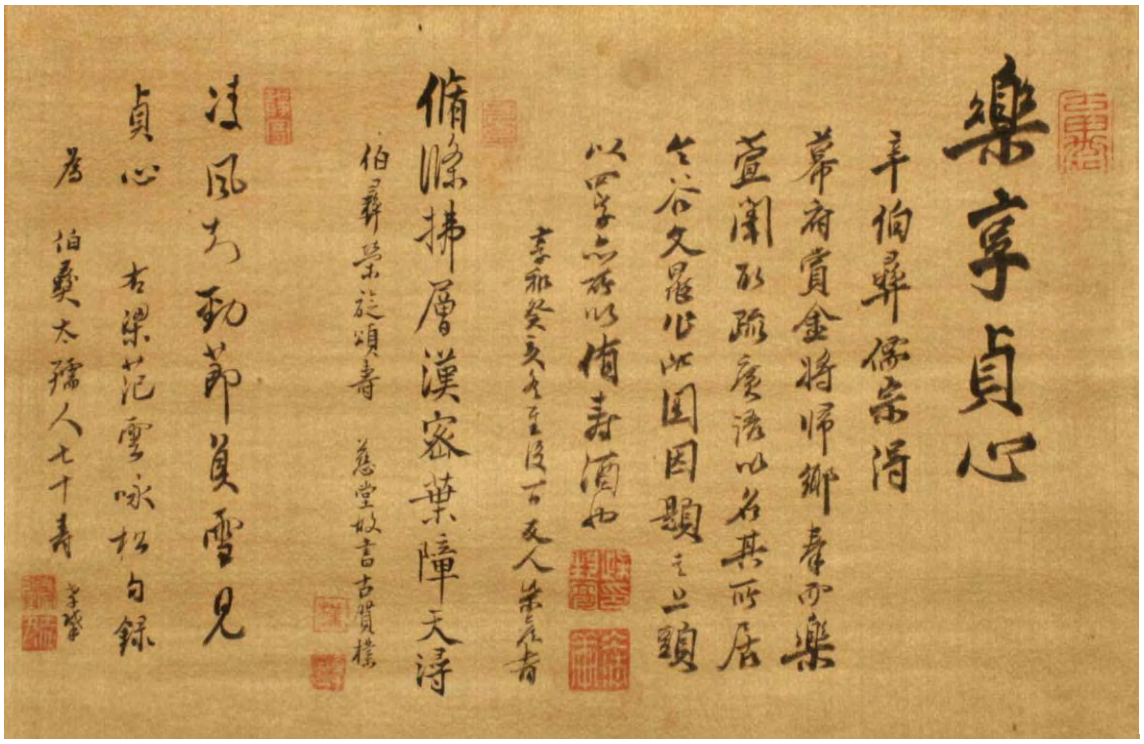
このとき、才蔵は幕府からの褒賞金をもとに、郷里に戻ったのちに、母の喜寿を祝う予定であった。

これは、前漢の疏廣の故事にならったものであり、長寿の吉祥である松が描かれ、柴野らがその孝養を称えたのであろう。

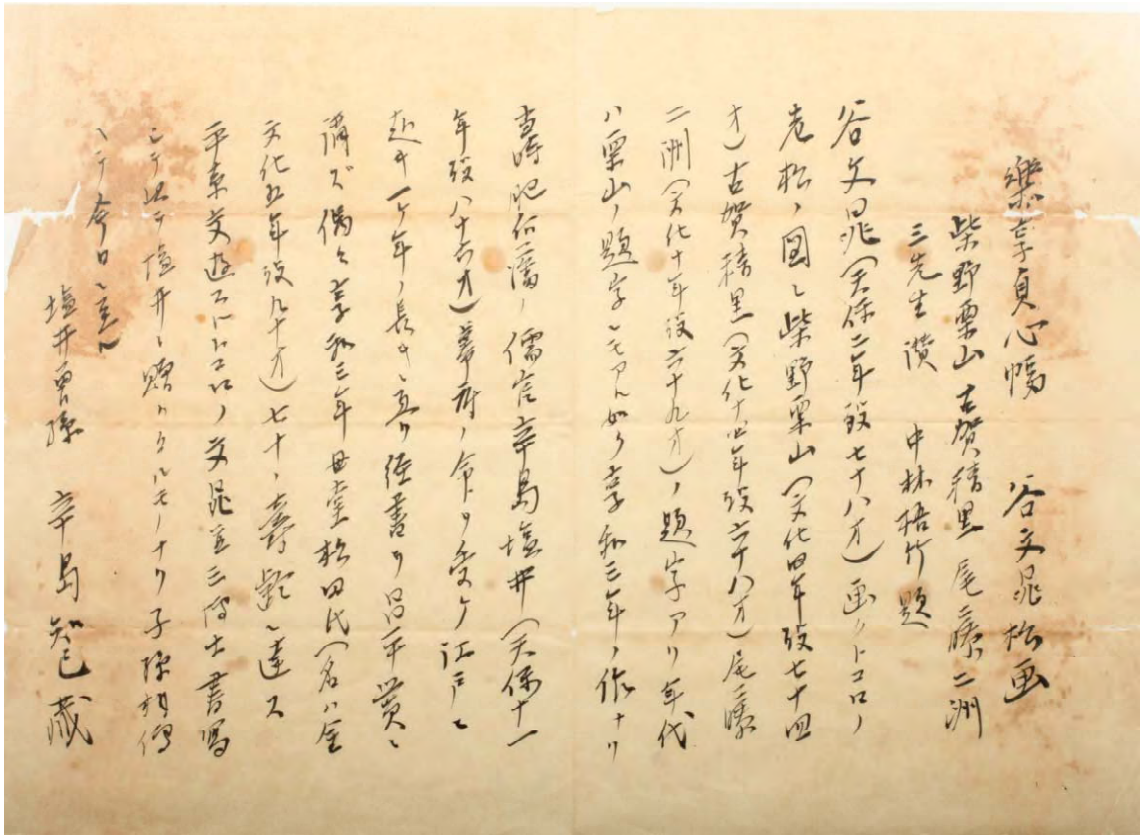
本資料の箱書には、「樂享貞心幅　谷文晁松画　柴野栗山　古賀精里　尾藤二洲　三先生讃　中林梧竹謹題」とある。

また、才蔵の曾孫にあたる第十四代・知己の説明書きが同封されており、表装もこのころにやり直されたと思われる。

なお、才蔵の母（松田氏、名・金）は、文化五年（一八〇八）に九十の長寿を藩から賞され、その年に死去している。



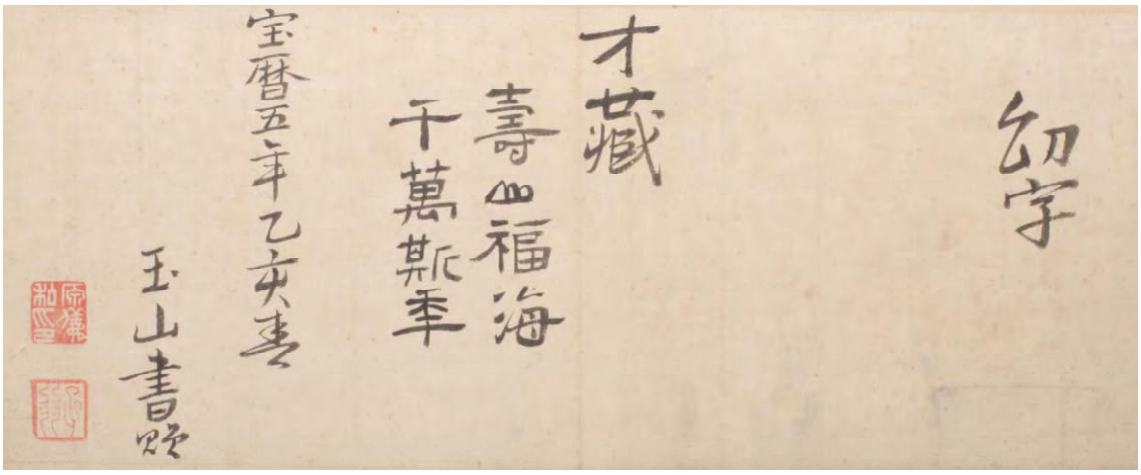
（尾藤二洲）　（古賀精里）　（柴野栗山）



（辛島知己の説明書き）

22　書画帖（辛島塩井傘寿祝）

天保五年（一八三四）



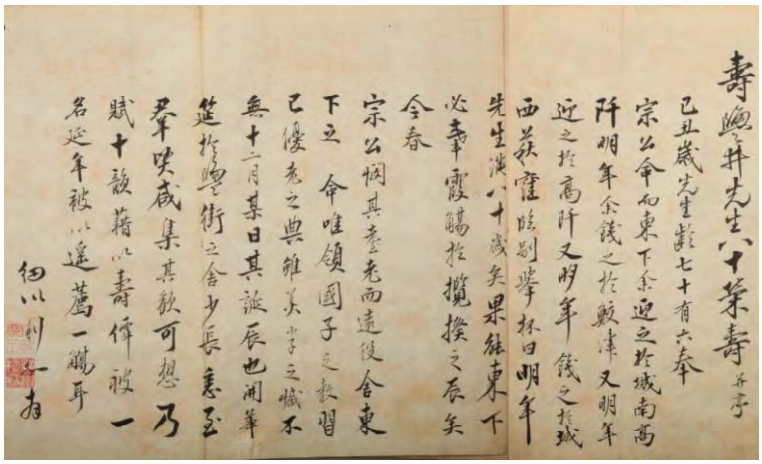
時習館教授の職にあった第八代・才蔵の傘寿（八十歳）を祝い、時習館関係者や門人から詩文や書画が贈られた。

その三十点を超える作品と辛島家に伝わった「玉山先生幼字之書」（上写真）などを折本に仕立てている。

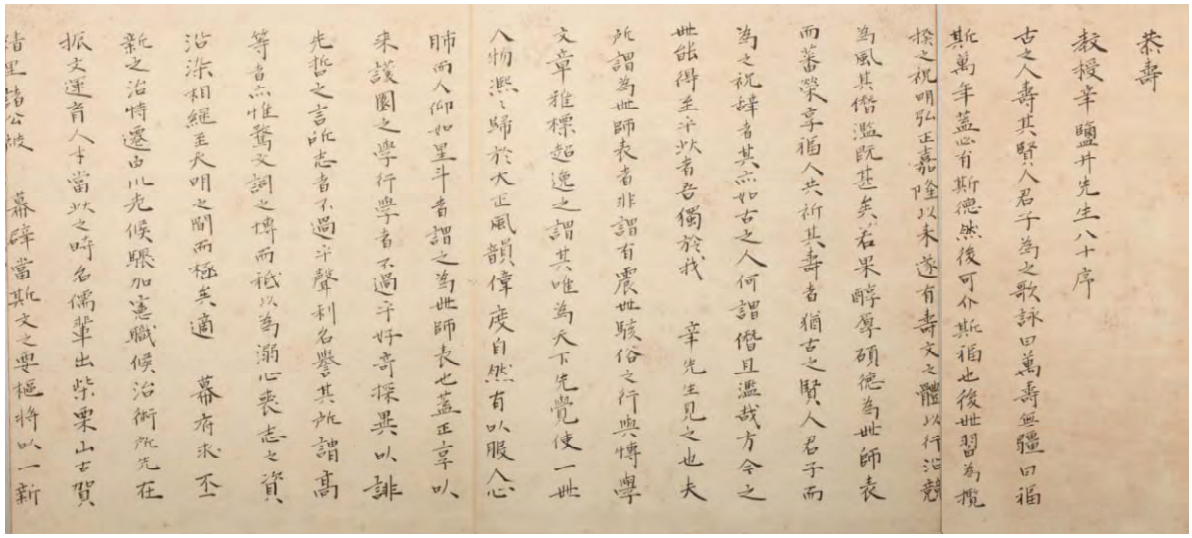
本資料に収録作には、細川内膳家の細川忠壽、新田藩の細川利和、時習館助教・大城準太、訓導・蟹江寿右衛門などの作がみられる。

後半には、若き日の横井平四郎（小楠）や木下業廣（犀潭）の名もみえる。後年、この小楠が「高本以下ハ小ナリ」と、時習館の教育や才蔵ら教員を批判したことはよく知られている。

（細川忠壽）



（細川利和）

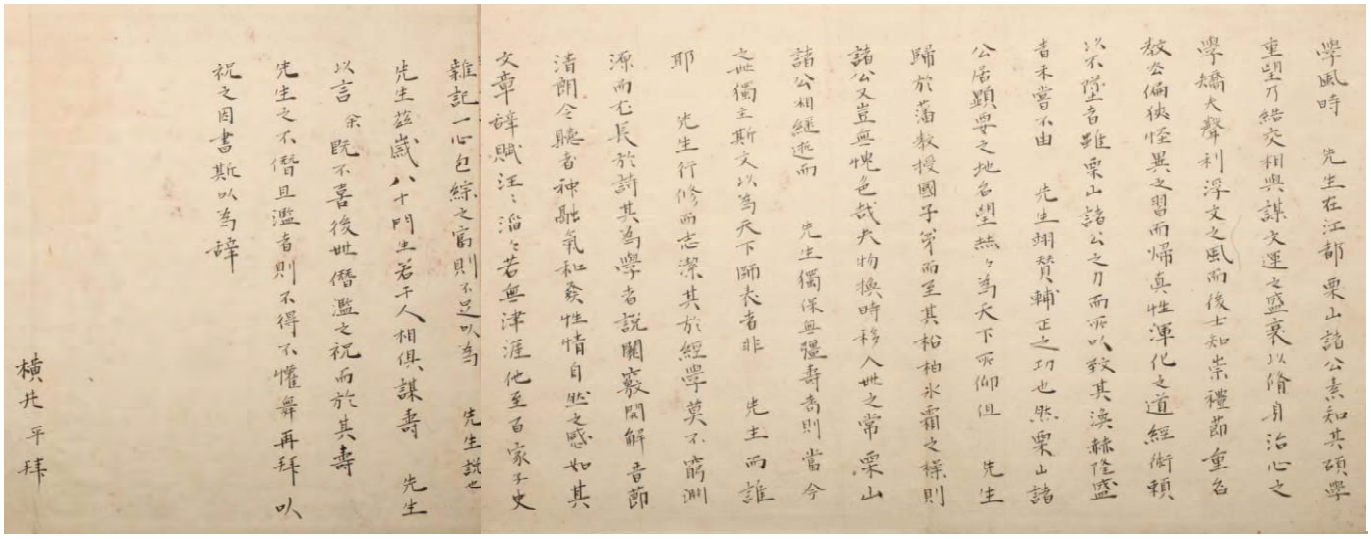


茶壽

教授辛鹽井先生八十序

古之人壽其賢人君子為之歌詠曰萬壽無疆曰福斯萬年蓋必有斯德然後可介斯福也後世習為攬揆之祝明弘正嘉隆以來遂有壽文之體以行沿襲為風其僭濫既甚矣若果醇厚碩德為世師表而蕃榮享福人共祈其壽者猶古之賢人君子而為之祝辭者其必如古之人何謂僭且濫哉方今之世能得至平以者吾獨於我　辛先生見之也夫所謂為世師表者非謂有震世駭俗之行與博學文章雅標超逸之謂其唯為天下先覺使一世人物熙熙歸於大正風韻偉度自然有以服人心肺而人仰如星斗者謂之為世師表也蓋正享以來該圃之學行學者不過平好奇探異以誹先哲之言所志者不過平聲利名譽其所謂高等者亦惟奮文詞之博而祇以為溺心喪志之資治淡相經至天明之間而極矣適　幕府求丕新之治時遂由此先候縣加遠職候治術所先在振文運首人士當以之時名儒輩出紫栗山士賀清里諸公後　幕府當斯文之要極將以一新

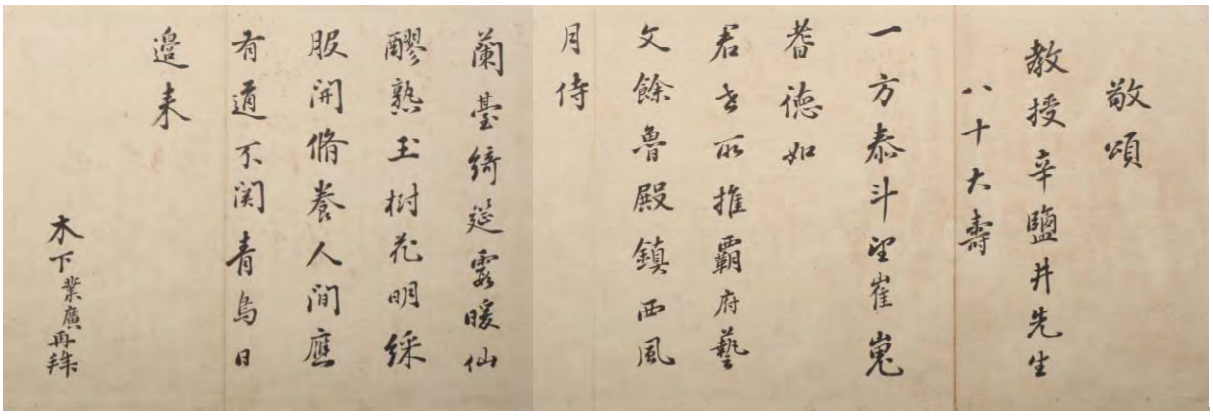
（横井小楠）



學風時　先生在江都栗山諸公素知其碩學重望乃結交相與謀文運之盛衰以脩身治心之學矯夫聲利浮文之風而後士知崇禮節重名教公偏狹怪異之習而歸真性渾化之道經術頓以不墜者雖栗山諸公之力而亦以教其渙絲隆盛者未嘗不由　先生翊贊輔正之功也然栗山諸公居顯要之地名望赫赫為天下所仰但　先生歸於藩教授國子爭而至其柏舟氷霜之操則諸公又豈無愧色哉夫物換時移人世之常栗山諸公相繼逝而　先生獨保無疆壽者則當今之世獨主斯文以為天下師表者非　先生而誰耶　先生行修而志潔其於經學莫不窮測源而尤長於詩其為學者說關雎解音節清朗令聽者神融氣和發性情自然之感如其文章辭賦汪洋若無津涯他至百家子史雜記一心包綜之富則不足以為　先生說也

先生茲歲八十門生若干人相與謀壽　先生以言余既不喜後世僭濫之祝而於其壽先生之不僭且濫者則不得不懽舞再拜以祝之因書斯以為辭

横井平拜



敬頌

教授辛鹽井先生

八十大壽

一方泰斗望崔嵬

耆德如

君子所推霸府藝

文餘魯殿鎮西風

月侍

蘭臺綺筵露暖仙

醪熟玉樹花明綵

服閑脩養人間應

有遺不閑青鳥日

邉来

木下業廣再拜

（木下犀潭）

▲清浦奎吾との親交

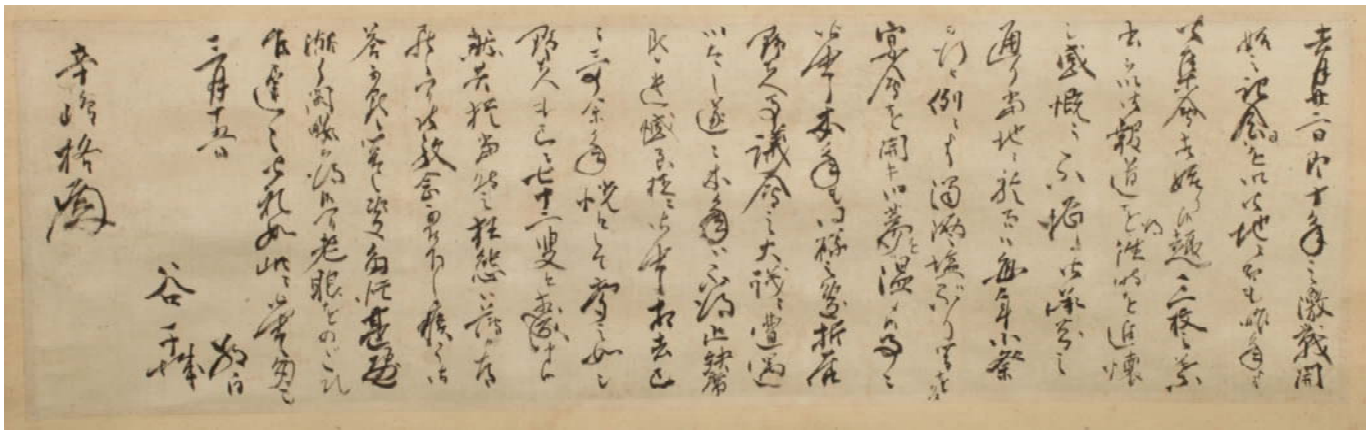
23 清浦奎吾書扁額

明治時代後期〜大正時代初期

「深蔵若虚」（深く蔵して虚しきが若し）とあり、これは「史記」（老子韓非列伝）の老子の言葉で、賢い者はむやみに自分の能力をひけらかさないという意味である。

「奎堂」は清浦奎吾の号。清浦は熊本県出身の政治家で、大正十三年（一九二四）に第二十三代内閣総理大臣となった。

この書は第十二代・格に贈られたものと考えられる。清浦は県出身の在京政治家として、格が県属であった頃から職務を通じて交流があり、格が上京した折には晩餐会を共にするなどしている。



（釈文）

去月廿二日即十年之激戦開
始之記念を以御地ニ而も昨年より
御集会相始り候趣、三枚之葉
書ヲ以御報道を往時を追懐
之感慨ニ不堪ニ、御承知之
通り当地ニ於而ハ毎年小祭
ヲ行ヒ例ニより濁酒・塩ぶり等を（ヲ以）
宴会を開キ旧夢○温（を）メ候事ニ
御坐候、本年も同様之処、折節
野夫事議会之大議ニ遭遇
いたし、遂ニ本年ハ不得止欠席
仕候、遺憾至極ニ御坐候、相去已
ニ三十余年恍として夢之如シ、
野夫も已ニ七十二叟と相成申候、
然共猶当時之狂態ハ薄ク存
居候間、御放念可被下候、疾く御
答可願候筈之処、多忙甚敷
漸く閑暇ヲ得候間、老眼をのごひ、
乍遅々御礼如此ニ御坐候、匆々、

三月十五日　　敬白

谷干城

辛島格殿

▲熊本鎮台指令長官谷干城、晩年の書簡

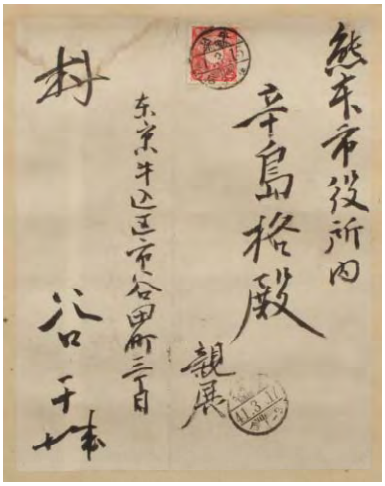
24　谷干城書簡（たにたてきしょかん）

明治四十一年（一九〇八）三月十五日

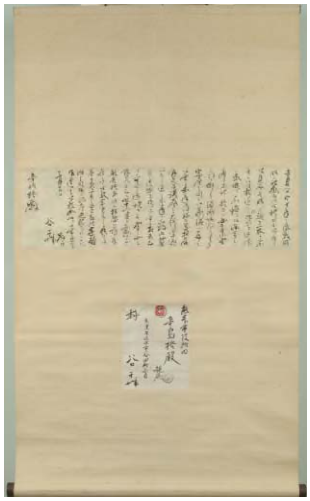
谷干城は、明治十年（一八七七）の西南戦争で政府軍熊本鎮台司令長官として西郷軍の攻撃から熊本城を守った人物で、その後政治家となり、明治十八年（一八八五）に成立した初代内閣では農商務大臣を務めた。

本書簡は、谷から第十二代・格（いたる）（熊本市長）に宛てたもので、西南戦争を記念した集会による多忙のため欠席する旨を述べている。谷はこのとき貴族院議員で、三年後の明治四十四年（一九一一）に七十五歳で死去した。

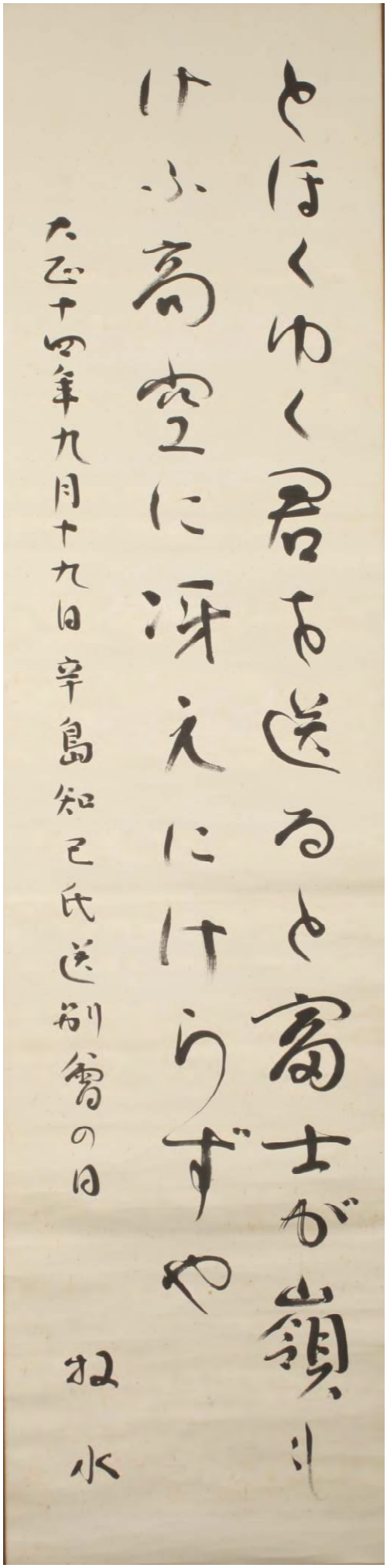
なお、書簡本紙と封筒が掛幅に表装されている。



（封筒）



（全体）



▲各地の文化人との交流

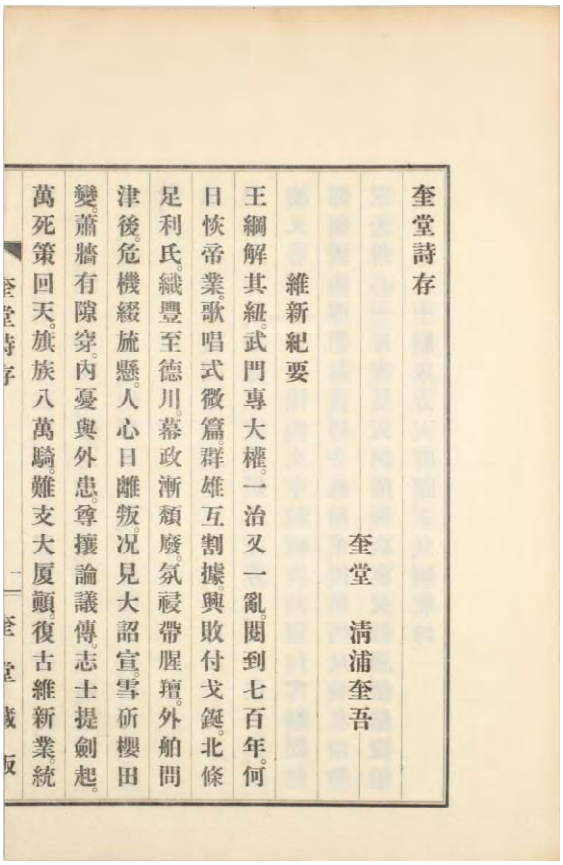
25 若山牧水書幅

大正十四年（一九二五）九月十九日

若山牧水は、宮崎県出身の歌人。大正九年（一九二〇）からは静岡県沼津に居住した。

第十四代・知己は静岡県内務部長を務めていたが、熊本市長に就任するため静岡を離れることとなった。

この書は、知己の送別会に牧水が詠んだ歌で、静岡の情景に重ねて惜別の思いが表現されている。



奎堂詩存

奎堂　清浦奎吾

維新紀要

王綱解其紐。武門專大權。一治又一亂。閱到七百年。何
日恢帝業。歌唱式微篇。群雄互割據。興敗付戈鋋。北條
足利氏。織豐至德川。幕政漸頹廢。氛祲帶腥羶。外舶問
津後。危機綴旒懸。人心日離叛。況見大詔宣。雪斫櫻田
變。蕭牆有隙穿。內憂與外患。尊攘論議傳。志士提劍起。
萬死策回天。旗族八萬騎。難支大厦顛。復古維新業。統

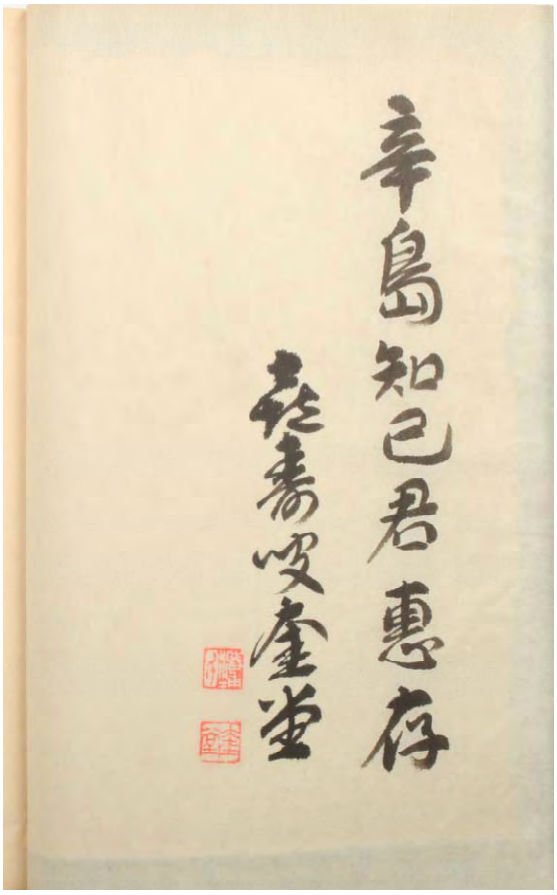
▲親子二代にわたる親交

26　奎堂詩存（けいどうしぞん）

大正十五年（一九二六）

『奎堂詩存』は、清浦奎吾が喜寿（七十七歳）の時に出した漢詩集。本資料は、表紙見返に「辛島知己君恵存　喜寿叟奎堂」と書かれ、第十二代・格（いたる）の長男・知己（ともき）に贈られたものである。

知己は、清浦が中心となり創立された発明の奨励などを行う帝国発明協会の理事を務めるなど、清浦とは父の格とともに親交があった。



（表紙見返）